

ドイツ・西部メンヘングラートバッハ市のミュンスター教会での
IPPNW（原爆戦争の防止を目指す、社会的責任をもつ国際医師団体）
主催の講演 2022年3月17日 オンラインで同時中継

<https://www.youtube.com/watch?v=aTrz2IjsNYY>

題目「これは時代変換なのか、ならばどこへ？」

アンドレアス・ツーマッハ 1954年 ケルン生まれ
ジャーナリスト、ベルリン taz (Tageszeitung) 紙 政治部担当

17:22 みなさん今晚は。この実に印象的な建物へ御招待いただき、心より御礼申し上げます。恥ずかしながら、ここへ参ったのは初めてです、無論、ひどい戦争という悲しい機会ではありますが、ここに参れてうれしく思います。

18:01 まず最初にこの会場のみなさんや、オンラインで聞いていただいている皆さん全員に大事なお願いがあります。というのも私は2月28日以来、今夜のような講演を会場やオンラインでほとんど毎日のように行っています。そうしてまたユーチューブにも登場しております。

18:16 そうしますと、たびたび聴衆からの反応というものがあり、メールや電話が来るのですが、ちょっと感情的なことがあるのです、そういう方は正しく理解いただけていないか、正しく聞き取ろうとしないようで、私の言葉だとして間違っただけを流しているのです、こういうことは実に腹立たしく、気分を悪くさせます。それは公共の議論中でもおき、テレビ討論会でもたびたび起きています。のぞむらくは、 こういう人たちが広い意味でも狭い意味でも平和運動を進めていないことを願うのみです。

19:08 それから講演を生で聞けない方にお願ひですが、ユーチューブでの話は、どうか最初から最後まで聞いて下さいね。今夜の講演もユーチューブで聞けますが、他、ブラウンシュヴァイク、ノットルン、そしてヴェルツブルクでの講演もあります。

19:42 こうしたことを何故私が先に述べるかといいますと、いまおきている、民族の権利を蹂躪する国際法違反のひどい犯罪、この戦争を正当化する理由は全くないからです。

19:58 冷戦後、過去32年間におきた西側での民族の権利を蹂躪する戦いや衝突、例えば2003年におきたイラク戦争では数百万人の犠牲者が出ました、

でも、だからといってそうした事実によって現在の忌まわしいウクライナ戦争を正当化したり、重視しなかったり、過小評価したり、理由づけしたりはできません。

20:28 それから、破られた約束、アメリカ政府やドイツ政府による1990年2月にミハエル・ゴルバチョフに、ナトー（北大西洋条約機構）が与えた証拠のある、東欧への拡大はしないということ、これについては論議があり、認めたがらない態度がありますが、きちんとした記録が存在し、提示できます、不満のある方は西側の記録を確認して下さい。

しかしこの守られていない約束も、現在の戦争を弁護したり正当化はできません。

21:14 かしながらヨーロッパ大陸に平和を願う希望を捨てないのであれば、それはロシアと一緒になければ不可能です。ヨーロッパ大陸における平和な秩序というものはロシアなしでは、それどころか、ロシアに反対の立場ではあり得ません。

単に地理的事実からだけでもそうです。

21:34 このことをエゴン・バー（ドイツの政治家、SPD、1922-2015 訳注）は50年前に確認していました、そしてこの状況は今日までなにも変わっていません。そして私達が平和という目標を捨てないのであれば、（私はそれを諦める気はありません）ならば、過去32年間の間違いや、間違った態度、間違った方向付けを、変えねばなりません。冷戦の勝利者としての立場にあり続けることを西側は乗り越えねばならないのです。

私はこの問題についてあらゆる疑問に決定的な回答をあたえることは出来ていませんが大雑把に3つの項目にわけました。唯いくつかの方向付けを試みたいと思います。

22:20 第一項目は「いま何をすべきか」です。いま何がおきねばならないか、何が起きるかもしれないか、いま、残酷な戦争の最中ですが、いかにしてこれを出来る限り早く止めることができるか。犠牲者の数をいかにして低く抑えるか、そして市街の破壊の大きさをどのように抑えるかという事です。

22:44 第二項目はこの講演のタイトルでもありますが、「これは時代変換なのか、ならばどこへ？」2月24日からの動きがそうであるのなら、この時代変更はどのような方向へいくのかという事です。

23:00 第3項目は、この戦争が終わったとしたら、そしてプーチンの時代が終わったとすれば、何がヨーロッパの平和のための土台となるか、という問いです。

23:17 では最初の項目、今何をすべきか、この戦争の終わり方は一体どういうものなのでしょう、私の推測を5、6例ほど述べましょう、それは蓋然性があるものからあまりないものがあります。

23:36 題1例 プーチンの周辺の内部権力者が何人か、ストップと言ってプーチンを貶めます。これらの人間はみなプーチンと同じような立場であり、経歴も似て、年齢も70歳前後で、プーチンはその上に立っています。私はこの可能性は少いと見ています。

24:25 第2の可能性は、ロシア経済界の人間が、とくにオリガーヒと呼ばれる、イエルクイン大統領の時代に、つまり1991年から1999年までにソ連の経済界の最もうまみのある領域を手にした金持ちで、特に化石エネルギーに関わる連中の中で、戦争は停止されねばならない、これによって我々の特権、将来の利益が損なわれるからだ、だからプーチンは他の人間と取りかえねばならないというものです。

このような可能性は全く除外できないとはいえません、最初の数週間で、このオリガーヒの中にはすでに苦情を言っていた人もいました、特に外国に住んでいる人ですが、ただしこの金持とプーチンの経済関係は過去20年で変換しています、もともとプーチンはこれらのオリガーヒに依存していました、プーチンはこれらのオリガーヒと取引をしています、

どうということかという、「さあ、ここに君たちのうまい儲かる仕事がある、君たちはこの特権を保持していけるが、それは私の政治に干渉しない限りだ」そしてこの取引をしなかった人間はいつの間にか、消え去るか、除去されています。今になって、プーチンのオリガーヒへの依存は小さくなり、その逆が大きくなっています。まあ、でも待ってみましょう。

26:14 第3の論議すべき可能性ですが、それは国民の社会的な貧困化です、ロシアではこの戦争以前から貧困は全国的に始まっていて、今回の制裁によりこれはさらにひどくなっていき、国民の不満は高まり、それが圧力となって国民からのプーチン反対の動きとなる、

もしもロシアに行動可能でよく組織された民主的な野党が存在して、それが権力を取れたとすれば、民主的な選挙を行って法律にのっとりた正当性を造り上げることを期待できるでしょう。しかし私には、行動可能でよく組織された民主的野党の姿を見ることは残念ながら出来ません。

27:12 これはそのような動きを圧倒的に阻止してきたせいで、まさにプーチンの仕業です。そして、もしもこのような政府転覆が起きたとすれば、権力の座につくのは、これまでよりもさらに悪質な連中であり、プーチンは原爆を所持していて、それをコントロールはしていますが、この連中はそうはないかもしれないという気分悪い予測を私はしています。

27:54 第4の可能性ですが、それはウクライナ政府の軍隊がこの戦争を軍事的に勝利するというものです。ウクライナ国民には何度も調査が行われ、75パーセント以上はこの終戦の形だ、という回答になっていますが、これは無論希望的観測であり、私は違った予測をしています。ロシア軍隊の格段に巨大な軍事的優位性は、例えば、兵士としては通常の兵隊の上に、さらに200万人以上の男性が予想され、軍備・兵器所有の優位、空軍もそうです。これまでの戦争での困難さ、数日間で占領する予想であったのが長引き、プーチンも同じように容易ではない、それでも私はウクライナ軍隊が勝利する可能性があるとは思えません。

29.12 しかしこれはさらに疑問を抱かせます。一体この戦争を続けて何になるのだろうかという事です。この戦いに兵器を送り続ける意味はどこにあるのか、このバランスの取れ

ない戦争につき込む意味がどこにあるのか、それについてはあとでもう一度話しましょう。

29:30 第5の可能性は大っぴらに議論できず、公的に発表すべきではないのですが、それでも私はそれに言及しましょう、なぜなら、私が講演をしたあとに、聴衆の方々が質問にきたり、電話を掛けたり、メールを出したりしていることがあるからで、その質問とは、「私は本当は平和主義者なんですが、ロシア軍隊の中には、ドイツの（ヒットラー暗殺を試みたような・訳注）1944年7月20日の男はいないのか」ということです。もちろん私はプーチンをヒットラーと比較するつもりはありません。別の質問は、アメリカはすごい技術を持っていて、最近では完璧なドローンでイランのイスラム教の最高指導者かつ軍人を正確に射ることができたではないか、何故アメリカは、それをプーチンに対してやらないのか、という質問がありました。

30:45 このような疑問はみなさんの頭の中にもあって眠れぬ夜を過ごされたかもしれません、これに対して私は言いたい、そんなことはやってはならないし、そうしたことを呼びかけてもいけません、先週アメリカ人議員が非常に怪しげなことを行っていますが、この先数日、数週、あるいは数年間はプーチンと一定の事を話し、交渉し、決定しなければならないとしたら、そして私の意見はその通りで、後に詳しく説明しますが、それであれば、先のような呼びかけは彼をさらに隅に追いやり、悪い作用を及ぼすだけでしょう。

31:35 そしてもしも、そのような専制君主殺人が本当におきたとすれば、私達は翌日にそのことを知るでしょう、その後何が残るでしょうか、残るのはプーチンの顔をつぶさない戦略の試みでしょう、それによって彼やその取り巻きの顔をつぶさずに戦争を止められるためにです。

公的なロシアとウクライナ間の停戦交渉は、ほとんどの場合、ベラルーシとの国境付近で行われていますが、非常に希望を失わせるものです。そして今までには何か妥協案が出てきたというわけでもありません。これまで、住民を逃がすための人道回廊の決定すらなく、ここ10日間、攻撃の続く、マリオポールから市民は逃げる事ができていません。何も休戦の兆候もありません。休戦もないので、停戦は話になっていません。そして政治的妥協策のしるしも全く見られません、停戦の提案はここ数日の間にウクライナとロシアの

双方から出されてはいて、ゼレンスキーは中立国というのを可能性として出し、ロシアも同じ言葉を使ったものの、ゼレンスキー側はスウェーデンやオーストリアのような中立を意味したので、ロシア側はそれを拒否しました。

33:57 するとゼレンスキーは、「私達はもうナトーに加盟することにこだわらない、ナトー自体いずれ、それを望んでいない、ナトーは遅れてるんです」と言いましたが、それは国民への言葉、自己防御の表現でした、それからゼレンスキーとその外交専門家は最近のインタビューで、「いまロシアに占領されているクリミア半島や独立国家としてロシアに承認された二つのドンバス地方については、話し合う用意があり、特別のスタンスをもつ国としてみとめる」と語りましたが、ウクライナには、安全への確実な保証が非常に重要だと彼は言っています、具体的形式は挙げていませんが、一定の国家による後見のついた安全保障ということです。

35:09 これ以上のことを私は詮索しませんが、ただ、申し上げたいのは、このような妥協案が実際成立するとしたら、まずはこの残酷な戦争が終わりを迎えて、私達はみな、ほっとして安心するという事です。無論この戦争の当事者であるウクライナ人はもっとそうでしょう。

35:34 けれども無論このような妥協案は同時に非常に後味が悪く、極端な場合、この妥協案を挙げた双方がピストルを相手のこめかみに当てているような感じでしょうか。妥協が成立することは重要です、出来るかもしれないし、全然できないかもしれないが、成立の可能性は岩に永久的に刻印されているわけではありません。私達はそれを明確に意識していなければなりません。

36:10 私達はさて、今何ができるのでしょうか。非常に具体的に、今しなければならないのは、両国の妥協がいつの日か成立するか、あるいは全く成立しないかに関係なく、まず私達はこちらへやってくる大勢の人たちの世話を十分にしなければなりません。ウクライナ難民の事です。そこにはいくつかの展開があります。

36:41 私はベルリンに住んでいますが、ここ数日、中央駅で非常に多くの人たちが集まっているのを見かけました、命がおびやかされている状況、戦争から直接移動してきたのです、そこには非常に大きな支援の力があります、ボランティアの人たち、市役所へのアク

セスし難さの克服、そしてベルリン市長による、他の州や他の大都市へ難民分散のための早急な協力を求める二度目の絶望的な呼びかけ、そして本日の午後、シヨルツ首相と各州知事の、今何をすべきか、特に財政的に何をすべきか、の会合がありました、ここに一種の傷口があります。

37:37 思い出しますが、2014年の末からシリア難民が押し寄せ初め、ベルリンで21015年8月31日にメルケル首相は新聞記者会見の際に「それを私達は克服出来ます」と言いました。それは実に正しかった。私はさまざまな批判もある中で、この言葉を弁護したい。彼女はこの7分にわたる会見で、私もジャーナリストとして同席しましたが、「これは巨大な課題であり、過去にこれまで、いくつかの難題を乗り越えてきたように克服できます、例えば大きな自然災害、ドイツ統一の過程です」これも日常的出来事ではありませんでした、メルケルは当時国民に訴えました、連邦政府、州と地方自治体が共同でおこなうのが重要であると。これは全部正しいことでしたが、

38:34このとき彼女が口にせず、必要なのに行わなかったのは、難民受け入れのために地方自治体に財政援助をするという事で、これによれば私達は克服できたのでしょうか。連邦政府が地方自治体に40億か50億ユーロの資金を送り、それによって自治体が難民を受けられるようにすることでした。これがまさに傷口でした、その後、多数の自治体では、いくばくかの生活援助金の封筒をもらった人に対して、歓迎の雰囲気というより問題な状況を生み出し、これによって AfD 政党が選挙運動で利益を得ました。(AfD ドイツの右翼政党 訳注)

39:14 さてもう一度、私達の過去をどうだったのか、振り返ってみましょう、1955年に旧ドイツ帝国占領地域から1350万人の避難民が旧西ドイツへ移動してきました。この人たちは大幅に破壊された、失業率60パーセント以上のドイツへ入ったのです。それは巨大な課題でした。いかにして私達はこの大問題を克服したのでしょうか。国際協力の援助によってです、この理由から援助をしなければならないとして、当時、国連に初めて難民に係わる組織も出来ました。その機関は3、4年後には役目を終えて消えてもよかったです。しかし、その後 大きな動き、フランスのアルジェリア戦争、インドシナ戦争、ベトナム戦争が続き、ヨーロッパ外では大きな難民の移動が続きました。そういうわけで、国連はこの機関はずっと存在すべきと決定しました。

40:21 私達は90年代前半に二度の問題を克服しました。それはボスニア・クロアチア戦争で1年半のあいだに40万人の難民がドイツに来ました。全員受け入れられ、当時政府の財政中、140億ドイツマルクの費用が掛かりました。70億ユーロです。そのとき、問題はありませんでした、殆どの難民がイスラム教徒であったにも拘わらずです。ボスニア難民、それは全然問題になっていません。

40:53 しかしその後、FDP CDU SPD の政党間で、このようなことを私達は二度と克服できない、これは社会への負担が大きすぎるということで、当時、私達の憲法の人権に関する条項16条は最初の姿とは似ても似つかぬ姿に訂正されてしまいました。そして可能な限りの障壁が建てられ、ダブリン条約では、難民はヨーロッパに最初に到達した国にとどまると定め、実際、殆どの難民は地中海沿岸の国々に着き、飛行ルートではビザなしでハンブルクやフランクフルト空港に到着した難民は処罰を受ける恐れがありました。そうして2000年にはドイツに合計2万人の難民が到達し、当時、政治家の間でも、ジャーナリストたちも、私の同僚もそうですが、世界の難民問題は解決済みという幻想が広がりました。

42:03 それは全く途方もない幻想でした。2000年から2014年の間の世界の難民の数は2300万人から8400万人と増加しています、しかしこの幻想のもと、多数のドイツの大都市や市町村が1990年代に造り上げた、難民の収容能力や適応訓練の機会や語学コースなど、必要な事柄を廃止してしまいました。その後シリア難民が大多数、ドイツに入ってきたとき、地方自治体の準備は出来ていませんでした。

42:46 2015年のイースターのときに、私はロイトリンゲン市での展示「1945年からのヨーロッパにおける逃避と迫害」の開会式に出席しました。私はそこで講演し、その後、在席した市長に「この町ではどんな状況ですか」と質問しました。すると彼は「私は難民がどこかの施設に集められることだけは懸命になって阻止しています。各家族のためにきちんとした住居をあたえられるよう努力しています。」私は、「それは素晴らしいことですが、うまく行ってますか」市長「問題は300軒以上の住居が空いていて、よい状態であるのに、私が難民をその部屋へいれようと思うと、その分部屋代に利息まで大家に払わねばなりません。でも市の財政には余裕はありません」と。これがまさに問題点で、そこに政府が関与すべきだった所でした。公共団体に援助をすべきだったのです。そしていま全く

同じ問題が起きています。ショルツ首相は今日の会合で、その対応を確約していませんから、各州は計画して必要な費用を捻出できるかどうか。

44:04 私がさらに心配しているのは、ウクライナから逃げてきている人たちの90パーセントは母とその子供です。その理由をはっきりしていて、男たちは戦争に協力しなくてはならず、外国へ出るのは禁止されていますが、これは人権蹂躪であるとはっきり言えません。ゼレンスキー大統領は兵役につける年齢である18歳から60歳の男性は国外へ出ることを禁止しました、でもこの規則は人権蹂躪です。そういうわけで現在の難民の90パーセントは女性と子供なのです。非常に心配しているのは私だけではありません、これらの女性たちが十分に経済支援を受けたり、まともな仕事に付けられればいいのですが、身売りを斡旋するような男の手に落ちないかという危惧です。そうしたことを強制されることです。実際、ミュンヘンの中央駅で関連業者が女性に話しかけて、売春を強要するために誘う場面がありました。この点に関して、私達はどこの街でも、このメンヘングラートバッハでもどこでも、そうしたことが起きないように目を光らせる必要があります。

45:23 私たちが何をすべきか、しなくてはならないか、の第3点は、私達の近くに住む、ロシア出身の人に、どんな形式であれ、プーチンの仕業の責任をとらせようとする事、圧力をかけること、あるいは追い出すようなこと、それには決定的に反対しなくてはなりません。私は次のような態度は間違いだと思います。ロシア人に対して、それが有名人であれ、著名な音楽家であれ、あるいは一般市民であれ、その人がプーチン側につくのか、つかないのかを決定させるような質問をすることです。私はこれまでのロシアとの民間交流を停止したのは完全に間違っていると思います。ロシア人との個人的な交流や姉妹都市関係などを一次停止するのには反対です。私達が必要なのはその逆のことです。

46:23 このことは戦争以前から当てはまっていたが、ここ5、6、7年前からドイツとロシア、またはドイツとウクライナの民間交流は減少し始めていました。70年代、80年代そして90年代に比較しますとね。学校でのロシア語教育は減っていきました。しかしロシアとのコンタクト、熱心なコンタクトが私たちには必要です、姉妹都市、そして個人的な交流、あらゆる分野で、誰もが誰かと始められます。そうでなければ、二つの国民の間で

敵視が始まるかもしれません。無論、ロシア公共放送の戦争かの偽情報の圧力下では当然ですが。

47:15 けれども私にはこのことをいうのに別の理由があります。プーチンの政治、戦争や、国内での専制政治、これには厳しくするどい批判がむけられますが、ひとつやっつけていけないことがあります。それはロシア国全体を悪魔とみなすことです。しかもそれがいま起きています。これで私は思いだすのですが、1990年のイラク戦争の際、イラクにはサダム・フセインという独裁者がいました、年配の方は覚えておられるでしょう、彼は1980年代にはずっと私たちのパートナーでした、私達の武器兄弟でした。西側、アメリカ、フランス、イギリスは彼に大量の兵器をわたし、ドイツは様々な技術や化学兵器を供給、ソ連も冷戦中なのに西側と共にこの国に兵器をあたえました、こんなことはこの時だけです。何故かというと、西側とソ連は新しい共通の敵をもっていたのです、それは急進イスラム化したイランでした。1979年9月にイスラム革命が起きていたのです。

48:32 しかしサダム・フセインはちょっと気が大きくなって、隣国であるクウェートに1990年8月に進攻し、そのとき彼は一晩にして最悪の指導者と変りはて、国連からは空前絶後最強の制裁を受け、それはアメリカとイギリスの要請によって、今も続いています。それから次のような出来事が起きました。上の制裁などはサダム・フセインを全く痛めつけません。しかし2003年のゴールデン・パレスの戦争までのことで、イラク国民は非常に損害を受けました。このときの制裁によって5歳以下の10万人以上の子供たちが食料不足で死亡しています。そしてドイツではイラク国民全体に対して全くのところ同情がありませんでした。なぜならサダムフセインの悪いイメージが国民全体に投射されていたからです。サダム・フセインは1990年の9月にアドルフ・ヒットラーに比較され、アメリカ大統領ジョージ・ブッシュがそれを言い、ドイツのインテリの間でも広がり、ハンス・マグヌス・エンツェンスベルガーは有名人として10ページにわたるエッセイをシュピーゲル誌に発表しました。比較がドイツ人の口から出て、自分の父親、祖父、曾祖父の罪を軽くする方向で示されていました。この効果は強く、破滅的で、サダム・フセインの悪いイメージは広がり、民族全体が悪い存在として世界に伝わりました、いま、これと同じようにプーチンは悪魔化されているようで、気になっています。

50:22 二つ目の項目にうつります。一体現在は「時代の変換」になるのか。ノー。私はこの概念を強く否定します。この表現は非常にかたよった思想に色づけられていて、そして西側固有の過去30年の歴史を捨て去る手段とし使われ、あらゆる軍事増強の目的として使われています。それを正当化しています。

そして思い出してみましょう、あの2001年911のツインタワーテロの後の数時間後、全く同じことが起きていました、翌朝、当時のアメリカ大統領ジョージ・W・ブッシュは国民の前に立ち、つまりテレビカメラの前で世界に向けて、時代の変換ということを述べました。同時にテロリズムに対する戦いを宣言しました。何人かの方々は思い出されるでしょうね。

51.26 ドイツでは、「そうです、911攻撃は人間性に対するテロの攻撃である、疑いもなく攻撃である」と言った声は残念ながら非常に少なかったのです。私たちは無論、国内外の手段、警察の力で犯人を捕えて法律的に追求しなければなりません、それによって犯人や裏にかくれた人間たち、計画者や財政支援者を、つまり人類への犯罪者をすべて捕え、裁判にかけねばなりません。しかしテロに対する戦いという表現は間違った回答でした。当時のドイツで、これを述べると、皮肉っぽく笑われ、あきれられ、抑えられました。

ドイツ議会でこのテロ攻撃に関する議論が行われたのは2001年9月19日でした。もし皆さんがこれをお聞きになりたければ録画は残っています。20年後、私たちはそのテロに対する脅威の警告が、残念なことに、非常に残念なことに、当たっていたことがわかりました。

52:34 これらの戦争はイラク戦場でだけでも100万人以上の死者、アフガニスタンでは10万人以上の犠牲者が出て、この戦いはいまでも続き、マリやエスレスローでは失敗しています。全ては公的な目標に従っていましたが、それは、イスラム・テロによる脅威を世界から消し去るといふものです。しかしこの戦争はみな失敗し、同じように「時代の変換」も間違いで、現在、時代は変わった、規則も変わった、何の警告もなしに、無選択にドローンを打ちまくり、どこかで誰かを殺し、今や民族存在の権利も消し去られ、これら一切は、私たちは新しい世界にいるのだという主張で正当化されています。

53:26 みなさんが2022年2月27日のドイツ特別議会を傍聴されていたかどうか、私には分かりませんが、それはドイツ議会始まって以来、初めて日曜日に行われましたが、私に言わせれば、怪しげな行事でした。ウラディミール・プーチンの二度にわたる演説、2月20日のウクライナ内の2州に対する態度の正当化、あるいは24日の戦争開始宣言の中には非常に問題のある部分があり、例を挙げれば、特に彼の、歴史を捻じ曲げようとする表現、ウクライナという国家は一度も存在したことがなかったという主張でしたが、27日に行われたドイツ議会は、歴史の否定・破壊、過去30年の歴史を捨てようとするものでした。しかし過去30年間に西側は現在の戦争が起きるようになった展開を阻止する責任があったのです。

54:31 私はこの日の議論を非常に怪しげと感じました、議論に参加した中でわずか3人のよりによって AfD 議員だけが、その演説の中で私達が1990年にヨーロッパ大陸にあったいまと異なる可能性を思い起こさせました、それはロシアも含む大ヨーロッパ、共同の安全保障機関・KSZE のことで、たった3人の AfD の議員がこれに言及しました、とはいえ、そのうちの一人は間違った結論に導き、時代は違う、私達は軍備増強しなくてはならないと述べました、しかし、いずれにしても SPD や緑の党の議員の誰一人、あるいはリンケ（左翼党・訳注）議員の誰も、この事に関し変更を求める勇気もなく、単に記憶をたどることすらせず、全員がただ、この「時代変遷」というモットーに従い、その後、オラフ・ショルツ首相による兵器輸送の発表について一緒に拍手し、1000億ユーロの特別会計費を確定し、憲法にもとる、この件についてはすでに（最大野党）CDU と意見の一致を見ていたようで、大多数が大きな拍手をしながら立ち上がり、その間、SPD と緑の党のトップは議会の前列目に座ったままで、幾分懐疑的に見えてましたが、今になって、全員がこの同じコースをたどっています。

56:05 この巨額についてもっと話しましょう、このものすごい金額や、これが軍備にのみ使われる目的であることは除外しても、このような議会の成り行きは民主主義上、憲法上、政治的に非常に問題があります、このように軍事目的の予算にこれだけの金額が組まれること、それが憲法違反していないことで、議会は憲法に書かれた非常に大事でデリケートな道理を自分で破壊していることとなります。わたしたちの議会でもっともデリケートな権利は、毎年新たに、そして根本的に翌年の予算案を論議して決議することです。それ以前には何も全く確約はしません。

56:57 最近、緑の党の責任ある政治家と私は議論しました。すると「そうですね、でもご理解下さい、軍備プロジェクトの場合、問題があり、まずは新しい兵器を定義する段階、それから計画段階、その後最初の試作品を製作し、最後に、シリーズ生産となり注文に至ります、この間に、つまり製作発展段階で何か問題がおきて、製作が遅れたり、来年の予算に当てていたはずの予算は完成が遅れて、手を付けられなかったりして、その結果この予算は使える時期がすぎて 失われてしまうのです。この年に使われなかった予算というものは簡単に翌年に当てることはできないのです。これ自体悪い規則ではないのですが、今回のような方法で、こうした事態を避けたいのです。ただし、今回の兵器製造に限っての、1000億ユーロの話です。」

58:06 このような規則を導入するのなら、言ってみれば、経済担当のハーベック大臣の再生エネルギー導入の明確なプログラムにも、太陽と風力エネルギーの推進について、この年はこれまで、翌年はこれまでと、2025年にはここまで至っていなければならないなどと規定されているが、2030年にどのようになっているのか、やはり問題があるだろうし、反対の声や、訴訟もあることでしょう、であれば、やはり同じように特別会計を作って1000億ユーロをいま決議して、そのための予算がいつの日か消え去らないように出来ることでしょう。こうした問題を明確にしたいので、例をあげました。

58.45 時代変換という主張で、いま論議が起きているのは、私達はやはり原発を保持すべきではないかということです、それによってドイツもナトの核兵器プロジェクトに参加できるだろう、アメリカの原爆はドイツのアイフェル地方に置かれていて、いまそれを新しいものと置き換える、新しい核兵器と交換する話になっています。新兵器は目標に正確で、爆発力も強く、迅速に使い、融通が利き、動く目標にも使い、そのせいで、モスクワへの脅威はさらに強力になるでしょう。そしてこの新しい爆弾は新しい攻撃用飛行機に搭載されねばならず、それも購入しなくてはならず、ちょうど決定された所ですが、アメリカのF35爆撃機と新しいオイロファイター機になりました、これによって新しい核爆弾がうまく作用できるようにするのです。まさにそのために今回の1000億ユーロの特別予算の大部分が組まれたのです。

1:00:01 私の意見では、今回の戦争は、新しい核兵器で脅威をあたえるという根拠にはなりません、そうではなくて、まさにその逆を証明しています。この戦争はまさに、大量殺人の道具である核兵器を地上からなくすための根拠になっています。何故これを私が言うかといいますと、ウラディミア・プーチンはその残虐な戦争をウクライナに従来の兵器を使った地上戦によって続け、幾分の抵抗は受けていますが、続けていけるのは、その背後に核があるからなのです。そしてそれによって相手に疑いもなく脅威を与えているのです。ただこの脅威によってナトー側はロシアに攻撃を加えられません、爆弾や兵器を送り続けているだけで、それ以上はできません。ウクライナ上空の飛行権利を取るわけにもいきません、そうするとナトー軍がロシアの飛行機を撃墜することになり、ナトーとロシアの戦いが始まってしまうのです。その結果、ナトーもさまざまな論争後、いつの日か、やはり核兵器を使用する決意をするかもしれません。

1:01:30 もう一度繰り返します、この戦争は、相手が核兵器をちらつかせる限り可能で、停止することができません。背後で核をちらつかせています。そして核の脅威とその信頼度、これも問題です。この議論に参加する人は、よく、もしウクライナが2008年にナトーに参加できていたらと言います、当時アメリカはナトーの会合でそれを望みましたが、メルケルとフランスの大統領はそれを阻みました。しかしこのときの最後のコミュニケには次の一文があります、ウクライナとジョージアはナトーに参加する予定だと。しかし、このシグナルはロシアに届いたのではありませんか。そして、もしも当時ウクライナがナトーの加盟国になっていたとしたら、今回のような戦争はおきなかったのではないか、その場合はナトーの連合義務が加盟国であるウクライナの防御の義務があったでしょう、しかし、この論理について私は警告を發します。このように自動的に進むとは限りません。

1:02:31 ナトーの連合義務条項5条には、必ずしも義務を行うわけではない、とあります。これはよく誤解されていますが、義務条項は非常に広範にわたり、政治的、外交的、攻撃した相手への圧力、経済制裁、その後に軍事的手段、まずは従来の兵器、そして最後の極端な段階で核を投入となります。私には明確にこたえられません、もしもウクライナがナトー加盟国であったとしてロシアから攻められたときに、必ず軍事的に介入したかどうか、まして核をつかったかどうか。これは保障されてはいません。ですから、ウクライナがナトー加盟国であったならば、戦争はおきなかっただろうという論議には確かな理由づけはありません。

1:03:31 よく言われることで、これによって時代変換を正当化されていますが、プーチンは今回の戦争を30年前から計画していたのだとか、しかしプーチンは **KGB**（旧ソ連秘密警察・訳注）ドレスデン部署のトップとして派遣されていて1990年にはそこを離れ、サンクト・ペーターズブルクへ行き、そこの副市長になりました。当時すでに、今起きていることの準備を開始し、組織を造り上げ、パートナーを探して資金を集めたとか、西側はみな間違っただけの行動を取り、プーチンに何も影響を与えられなかったとか、こうした主張を私は間違っていると思います。非常に突拍子もないし、どこにも証拠がありません。特にこの主張は発展することを全く無視しています。

1:04:30 すこし思いだしてみましょ。2001年の9月、ウラディミア・プーチンはドイツ議会に出席、そして完全な理想郷といえる、ゴルバチョフの理想をさらに広げた提案をしました。「私達はあなた方と共同でヨーロッパに安全システムを造りましょ、私達の安全システムとみなさんのとをまとめ、私達はみなさんのシステムに敬意を示し、その代わり皆さんも私達のものに敬意を払って下さい、」彼は共同の経済圏を提案しました、それはリスボンからウラディオストックまで広がるものです。このときドイツ議会では最後の席まで全員、立ち上がって大拍手をしました。しかしその後、プーチンが、モスクワに戻ると、何も起きないことを認識しなくてはなりませんでした。その後の数年でナトはどんどんと東へ拡大していき、ロシアとの国境に近づくばかりでした。それに加えて、当時アメリカのミサイル発射ステーション建設計画が東欧の加盟国にありました。その後プーチンはもう一度2007年にミュンヘンにおける安全保障会議に出席しました。私はジャーナリストとして在席し、彼の言葉を聞いたのですが、それは西側の態度に非常に落胆した響きでした。彼はもう一度言いました、「もしも私達が安全システムを共同で保持できるのであればいいが、そうでなければ、私達は独自にそれを組織化せざるを得ない。」

1:06:17 その時私は非常に驚愕しました、彼の演説のあとのコーヒー休憩のときに、名前は挙げませんが、安全保障のエリート専門家であった政治家、外交官、さらにジャーナリストたちがプーチンのことをからかう話をしていたのです。彼の言葉をまじめに受け取っていなかったのです。それは決定的間違いでした。14年間、このミュンヘンでの安全保障会議の会議長であった ヴォルフガング・イッシンガー氏は、最近まで西側の態度を保持したいましたが、彼ですら、最近のミュンヘン安全保障会議のうちにジャーナリストに

「私達西側は重大な間違いを冒した、私達は2007年2月にプーチンの演説をもっとよく聞くべきであった。」と言いました。

今、彼は「私達ドイツは2008年に アメリカがナトーの加盟国にウクライナとジョージアを加えると最終コミュニケに書くことを、何故阻止できなかったのだろう。」と言っています。

1:07:42 もっと違う内容を読み上げます。ここで何が起きたか、どんな間違いが起きたか、簡単に明確にしたいので。アメリカの外交官で歴史学者である、名前を思い出せる方もおられるでしょうが、ジョージ・ケナンです。

彼は長年、1926年から1963年までアメリカ政府の外務省に所属した人で、すでに亡くなっています。彼はちょうど25年前にニュー・ヨーク・タイムズの社説を書いています。1997年2月5日付で、タイトルは「宿命的過ち」(A faithful error)でした。この社説から引用しましょう。

1:08:26 ナトーの拡大はアメリカがおこなったもっとも宿命的過ちであった、冷戦後の拡大地域全部のことだ。こうした動きは、ロシアの中で、愛国的、反西側的、軍事行動への傾向に火を付ける可能性があった。これはロシア国内での民主的な発展に悪い影響を与える可能性があった。そしてこの悪い影響は冷戦時代の悪い雰囲気をもたらし、東西の関係を揺るがし、ロシア政府の外交政策に、私達に全く合致しない方向を与える可能性があった。残念なことに、ロシアはこのような非常な不安定な状態にあり、ほとんど麻痺していた。それは1997年のこと、イェルツィン大統領の時代で、そして二重に残念なのは、ナトーの東への拡大には全く何の必要性もないのに、冷戦後の東西関係の改善への希望がもたらされたのに、何故かわざわざ東へ拡大され、どの国がどの国と連携するか、つまり基本的にどの国がどの国に反対の立場にいるか、将来おきるかもしれない国家間の衝突や問題など分かるはずもないのに、さまざまな憶測を行った。

1:10:08これは1997年2月5日のニューヨーク・タイムズからの引用です。プーチンはこの警告や予測を完全に実現しました。ジョージ・ケナンは左翼ではありませんでした、彼は平和主義者でもなく、ソ連寄りでもなく、彼はソ連への封じ込め戦略の創始者で、共産主義ソ連の弱体化を計り、この戦略の軍事内容では、当時、ソ連から従来の兵器でドイツが攻

撃された場合、アメリカは即、大きな核兵器を持ち出して反応することになっていました、アメリカ国土からソ連の街にむけて長距離核ミサイルが撃たれたことでしょう。しかし、それは大事です、ジョージ・ケナンはソ連をよく知っていました。ロシアをよく知っていました。バルト海3国もです。彼は1920年代に、つまり第二次世界大戦前に若い外交官としてモスクワ、リーガ、タリンに着任、そして大戦中と戦後にまた赴任しました。彼はもう一度ロシア語を学び、ベルリンでロシアの歴史を学んでいます、つまり彼はソ連の歴史を知り、歴史的体験 その悪夢、その安全保障に係わる利害を知っていたのです。これは実に昨今の若い、全くものを知らないジャーナリストとの相違です、歴史認識がまったくない、そのせいで騒ぎ立て、70年代、80年代の東西の緊張緩和政策は全て間違っていた、みな失敗だった、これら一切は現在無用だ、これは残念ながら、私たちが今日、とくに若いジャーナリストからよく聞く言葉です。

1:12:16 最後の項目に入ります。平和の秩序とそれに必要な構築土台。

今から申し上げることをみなさんは、妄想だと思われると思います。しかしながら、プーチンのあらゆる独裁者行動に拘わらず、戦略行為の残酷さにも反する彼の落ち着きにも逆らって、西側の外交の努力や要請に冷酷に嘘をつき、西側を混乱させ、その際のドイツ外務大臣ベアボックの表現に私は例外的に同意しますが、それでも私は今回の戦争はプーチン時代の終焉の始まりだと思っています。私は彼の、2036年まで大統領でいたいという意図が実現しないと確信しています。形式的にはそれを可能にするように憲法は改正されていますが。

1:13:19 いま、すでに彼の権力や権威をゆるがす地滑りが始まっています、私にとって、それは戦争後3日目にすでに開始していました その時彼はテレビ会議で、今回の戦争が彼が希望したのとは違ってウクライナに稲妻攻撃が出来なかったことを白状しました。そして彼は何をしたか。彼はウクライナ政府の軍人に向けて、彼に言わせれば、ナチスである、キエフにいるゼレンスキーを失墜させよと要求したのです。二晩前の開戦宣言で、ドンバスの戦争でロシア系住民を殺戮したとプーチンが主張非難した軍人にむけてです。

1:14:04 それは私には、彼のいらだちの最初のしるしに見えました。第二に、ロシアは国際的に孤立させられました。3月2日にこれまで国連総会で歴史で一度もなかったような

144対5票の投票で、この戦争は犯罪と確認され、すぐに攻撃戦争を停止し、ロシア軍の無条件即時撤退を決議しました。

1:14:34 これは国連の歴史77年間で3度目に、国連安保理事会に属する国が戦争行為で、判決をうけた事態です。これはいつもモスクワが対象で、1度目は1979年のソ連によるアフガニスタンへの進攻、2度目は2014年3月27日にクリミア半島の併合を国連総会決議で大多数が国際法違反と規定されました。

そしてその3月16日になされた投票によればクリミア半島の併合は無効と宣言されました。他の安全保障理事会の棄権の権利のある国々は実は阻止できたはずですが、アメリカのベトナム戦争やフランスのアルジェリア戦争、イギリスによる北アイルランドでの戦争はみな判決を受けていました。

しかし今回のロシアの孤立がここまでになったのは2月24日に国連安全保障理事会が戦争をなんとかくい止めようと必死で夜中まで会議をしている間に、プーチンが戦争宣言を出したからです。これによって一般的にはロシア寄りだった国々にも、この行為は国連に対する侮辱とみなされ、これまでになかった状態となりました。つまり国際的に孤立しています。

1:16:10 第三に経済封鎖によって プーチンの権威が失墜し始めていて、ここで大事なのは、ウクライナのことです、もしこの戦争がどのような動きをとっても、6日間戦争になるか、何週もかかるか、ロシアの軍事的勝利に終わって、ウクライナが全体的に、もしくは部分的に占領されても、私は主張します、ロシアはウクライナを完全に掌握することは決してできず。それは当時の圧倒的ソ連軍が12万人の軍隊でもって貧しいアフガニスタンに装甲車や攻撃機が入ってもコントロール出来なかったのと同じです。1979年から8年間駐留して制圧を試み、1988年には撤退しなくてはなりませんでした。

1:17:13 ウクライナではさまざまな対抗、暴力なしの抵抗や暴力が続くでしょうから、彼らは幻想を抱いてはなりません、このような抵抗をモスクワではテロだ規定して、それに対応する戦いを起こすでしょう、決定的なのはプーチンはウクライナに何も提供できないことです、経済停滞のみです。ロシアは経済的には何も与えられず、政治的にも無、民主的政治については当然ながら、全くありません。この戦争は、プーチンが想像していたか

もしれないことと全く逆に作用しています、これは想像できないくらい、ウクライナ国民のウクライナ人としての意識を高め、反ロシア思想に強く色づき、そしてこの意識は長期的に簡単に変えられないのではないかと私は危惧しています。私は冷酷にも、今起きていることを一種の国民形成の過程だと言えらると思います。外からの軍事行動によって。

1:18:25 ですから、私は言います、プーチンは今後数年間はまだクレムリン宮殿にとどまって、外部から交渉せねばならない人物であるかもしれませんが、それは私達には想像できない、怒りをともなう事態ですが、しかし戦争が終われば復興の土台である平和な秩序、軍備のコントロールと軍備縮小が早急に必要です。

1:18:55 それは従来の軍備と核兵器に関して、両方の側に必要です。詳細をここで述べたいとおもいませんが、必要性は双方にあるでしょう。兵器、軍隊、将来どこに軍隊は駐留すべきか、国境の近くではなく 軍事訓練はどこで行われるべきか、軍事訓練は無いのが最善ですが、透明性を持たせ、信頼できる対策、そしてプーチンの12月初旬の提案と要求に対するナトーとアメリカが書式による回答の中で、基本的にはこのような事がはっきり宣言されています、しかしひとつの点が重要で、「ナトー国家群は将来の軍備コントロールにおいて、軍備や軍備縮小の範囲には、ロシアの軍備の範囲に対応して行われる。」とありました。これによってこの提案は最初から失敗に終わるのが明らかでした。

1:19:59 西側諸国は戦勝国としての意識をいい加減に捨てて、冷戦終結後の思いを捨て去り、交渉に参加して、その際、ロシアのもつ正当で当然な安全保障についての憂慮を聞かねばなりません。私自身、平和主義者ですから、このような当然の安全保障について受け入れるのは難しいのですが、何故ならば、このような表現ですと、常に軍備する権利があり、それによって脅威を与えたり、自己の安全性を守るために軍備を投入したり出来るからです。

1:20:40 しかしナトー諸国が自己の安全保障のための軍備を正当と宣言するのであれば、反対側も同じことをしていいはずですが、でなければ、何も機能しません。もしも今回の戦争で、ロシアが初めて暴力でヨーロッパ国境を変更した、あるいは試みた、踏みについた、ひとつの国家主権を破ったのだという主張があるとすれば、その主張者はわざと事実と異なる嘘をついているのか、その人の記憶はそれほど短いのか、と疑われます。1999年

にナトーは国際法を踏みにじる空爆をセルビア・モンテネグロ戦争で行っています。結果としてコソボはセルビアと無理やり分割され、国境ができました。無論、前提は違いますが、詳細も異なります、しかし、軍事的干渉やその結果おきる国境変更というものはパンドラの箱に閉じ込めておくはずなのが、開いてしまった、戦争加担し、しかもその結果、国境線が変更になるようなこと、こうした事実をナトーは1999年に行っています。無論これのせいで、今回の戦争を正当化するなんてことは全然ありません。これについて何度も議論した経験があります。

1:22:06 ロシア外務大臣ラブロフ氏を1990年代に知り合って、私は話したことがあります。他の人や、あるいは平和のために赴任したような人でも、「だからヨーロッパはロシアがクリミア半島を横取りしたと批判はできません、以前ヨーロッパはユーゴスラビア戦争で国境を変更するようなことを行った」といわれることがあります。その理由で、クリミア半島併合を正当化することはできません。ただし私達はセルビアの愛国主義者や、ボスニア・ヘルツゴビナの1999年の戦争時の行為で、ロシア軍を同じことに導いたのかもしれない。

1:22:39 私達の共同責任があるのは、国際法や人権擁護の規定の空洞化、切り崩し、弱体化で、この重要な国際法および人権擁護は第二次大戦中にドイツがひきおこした文明否定のホロコースト後に決議され、国連憲章の中で、一般的人権として宣言されています。

1:22:59 ヨーロッパでの平和建設のための二番目の土台は経済的なものです。現在誰もかれもが戦争の行方、狭い意味での軍事戦略について語っていますが、経済的問題も同じように重要です。

二つの点を挙げましょう。EUは2010年と2013年の間にウクライナと交渉して、EU加盟へ近づく段階を示し、まずは関税同盟、連合同盟、そしていつの日か完全な加盟国になるように計画しました。そして今、再び、ウクライナをEUに加盟させるための動きを始めました。このような交渉でEUは2010年から2013年に大きな失敗をしました。EUは当時のウクライナ大統領であったヤロシェンコに対して、黒か白か選ぶように迫ったのです。EU参加のための関税組合に入るか、ロシア側の組織で、カザフスタンやベラルーシが入っている、中央アジア関税組合にとどまるかです。このようなことを伝統的にロシアとの

貿易が50パーセントを占めるような国に尋ねることは（次の30パーセントはアジア向けですが）当然致命的でした。全くの間違いでした。

1:24:16 私はドイツ連邦国大統領が以前語ったことを本日思い出しました。2016年に彼がまだ外務大臣だったころ、インタビューで、非常に複雑な事を語りました、「この問題では、まず専門家、つまりブリュッセルの貿易関係者とモスクワの経済専門家がキエフでキエフの担当者と同じテーブルに付き、よくよく考えてみることです、存続しているロシアとウクライナの関税組合が将来ウクライナとEUで交わされる関税組合との互換性を作り出すのです」これを聞いた私は、そうだ、その通りだと思いました。これを試みなくてはならない、これは試みることができる、しかし、この提案は日の目を観ることがありませんでした。

1:25:04 二つ目の、もっと重要な点です。私達全員、ドイツやヨーロッパ諸国はみな優先的な関心をもっている、もしくは持つべきだと思います、ロシアに手助けすることです、此の先15年から20年後までに経済の化石エネルギーへの完全な依存から離れること、ロシアの経済力の80パーセントは化石エネルギーに頼っています、石油とガスを、掘り上げ、精製し、世界へ輸出します、もしこの完全な依存から抜け出られねば、私達の大陸はパリ気候条約の二酸化炭素減少の目標到達は破壊的に失敗します。私達ドイツ、そして隣国である、スイス、オランダ、フランス、他あらゆる国々でその目標に達することができなければ、一現在、それすら実現の見通しが立ったとはいえませんが、ロシアで何も起きなければ、やはり何も変わりません。私が思うには、今すでに、その方向へ操縦しなくてはなりません、できるかぎり具体的に準備すべきなのは、緑のエネルギーのパートナーシップをロシアと結ぶことです。非常に具体的にですが、私達は先の25年間の移行期間に緑のエネルギーである水素を私達が必要としていることを知っています、その際、風や太陽風力や太陽エネルギーだけでは十分迅速にできないからです。

何故この緑のエネルギーを風の強いシベリアで生産しないのか、あるいは日照時間の長い南部で太陽電池を設置できないのか、私達の技術を、ここで可能な技術を使えば、ロシアではここよりも安く再生エネルギーを生産する、それは不可能でしょうか。

そして生産されて緑のエネルギーを、使われることのない、問題のノルトストリーム2のパイプラインを使ってドイツへ輸出する、そのためにはパイプラインを補強する必要があります。

ることも知っていますが、私はまた思っています、ロシアと再生エネルギーパートナーシップを造り上げることはもはや技術的に実現不可能ではなく、唯一政治的意志に依存している。

1:27:39　そして最後の点、ヨーロッパの平和秩序ですが、いつの日か、それがこの名前にふさわしいものであるためには、過去32年間におきた軍事的に重大な出来事の傷を癒さねばなりません。次の世にも通用するように、何をすべきか、当然ながら、ヨーロッパの平和秩序のためにはクリミア半島紛争の解決が必要です。過去8年間、私は平和について様々な議論をしてきましたが、ある人と論争になりました、彼は言いました「それについてはいろいろさ。」それはロシア語でしたが、カタリーナ女王は1763年に「これはロシアに属している」と言っています。しかしカタリーナ女王よりも500年前を調べますと、クリミア半島はある時はウクライナに属し、ロシアに属し、あるときはウクライナに、またポーランドに、それから王国同志で取り換えたり、いろいろな動きがあり、今回の占領も正当化されたりしますが、ロシアに属していたとの主張もしやれこうべのようなもの。そこは何度もウクライナに属すると宣言されてきて、1975年にはヘルシンキで、1990年にパリで、ブダペストで再度、ロシア、アメリカ、イギリス、およびウクライナとで国境が確認され、その代わりにウクライナはソ連の原爆を保持しないと決定しています。

この件では協調的な同意を出すことが重要です。この紛争を解決するためにキエフ政府とも協調できねばなりません。例えば、国連で決議しOSZE（KSZEを受け継いだヨーロッパ安全保障機関 訳）で監視する、さらには選挙の可能性、ウクライナ国内でその地域の自治権を確立することです。それは単に言語の自治権のみならず、旅行、財政、つまり固有の税制で税金をすべてキエフに送る義務がないこと、行政自治です。

世界には同じような自治権の規則で機能しているものがあります。同じような方法でドンバス2地方の紛争も解決しなくてはなりません。同様にジョージアやモルダウ内での紛争も解決できるでしょう。そこにロシア軍が駐留してはヨーロッパの平和秩序の解決になりません。最後にコソボ・セルビアの紛争も解決されねばなりません。そこは全く秩序がありません、コソボは一種のマフィア腐敗国家で、そこから1万人の若い世代が逃げ出しました。そして西側で運を試しました。これは問題です。この1990年のナトーによる深

い傷口も癒されねばなりません。ここでもやはり協調的な過程を通して、ベルグラートの政府に参加することができれば、と思います。

1:30:56ご清聴ありがとうございました。少し計画よりも長くかかりましたことをお詫び申し上げます。